

句集

夜長

鈴木
ぽんこ

序

親愛なる鈴木ぼんこさんも又句集を出されることとなった。

彼女もインターネット句会のメンバーとしてご縁が生まれた一人である。召された故平島ひかりさんとともに吟行句会の準備のためにいつも献身的に奉仕してくださった。

桜散る犬のぼんこの背中にも

老犬に合はす歩みや日脚伸ぶ

ぼんこさんを語るにあたっては、まずその俳号の由来すなはち愛犬ぼんこに触れない訳にはいかない。大の犬好きである彼女は愛犬の名前をご自分の俳号にされたのである。ペットといえども生き物である以上天命があり、必ず別れの時が来ることは避けられない。

余命なき老犬看取る夜長かな

身罷りし愛犬悼む寒昴

私にも幼い頃の悲しい体験がある。愛犬との死別は家族のそれとまったく同じ悼みなのである。たかがペットというなかれペットロス症候群で人生を狂わせてしまう人もいるのだ。その彼女を救ったのは俳句ではなかったかと私は思うのである。

黄落に紛れしテニスボールかな

秋澄むやテニスラリーの音高し

彼女のもう一つの趣味はテニス、練習で汗をかき併せてストレスも発散できるのだという。高齢化で足腰の衰えをかこつメンバーが多いなか彼女はいつもここにこと笑っている。

ドライブの窓に伴走秋の雲

彼女の俳句を応援するために優しいご主人がドライブに誘ってくださるといふ。ご主人の理解があるゆえに私達も又彼女の労に甘えることができている。感謝に絶えない。

この句集には、そのご主人への感謝と愛犬ぼんこへの思いが詰まっている。天国で愛犬ぼんこと再会できるその日まで座右の宝として、ぼんこさんを励まし支えてくれることを信じ祈って序のことばとしたい。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

岩壁を攻め上るごとと蔦青葉

めつぶしの西日信号待ちの吾に

ひろげたる幼の手より青蛙

雁行す歩板に沿ひて九輪草

亡き友を偲び池塘の春惜しむ

波騒ぐごとくに風の雪柳

芽柳に風の生まるる川堤

磴半ば一息つけば山笑ふ

ひと刷毛に大書せしごと春の雲

春光に金の鯨反りに反る

奥宮の神鈴鳴らす寒九かな

乗り遅れ駅のベンチに日向ぼこ

黄金の夕陽ひろがる枯野かな

子ら去にてまた老二人薺粥

御降の道々駅へ子ら送る

冬 日 燦 頬 豊 かなる 寿 老 神

供 華 の 菊 枯 れ 果 て て を る 塔 婆 かな

黄 落 に 紛 れ し テ ニ ス ボ ー ル かな

粧へる山に夕日の襞深く

竹箒から逃げ出せる落葉あり

リハビリの腕励まして春を待つ

浮見堂へと尻向けて鴨潜く

草紅葉貼り付く雨の石畳

雨暗き森の小径のななかまど

杜鵑草みて絞り染思ふ

枯山水粧ふ遠嶺借景に

神の杜やまぬ葉擦れに秋を聞く

天守閣仰ぐ秀枝の薄もみぢ

参磴の歩みがたしや乱れ萩

句碑訪へば秋七草に隠れをり

参磴のここだ散り敷く百日紅

子羊とスキップす牧涼し

展望台奈落の谷に合歓の花

噛みますと柵に張り紙馬肥ゆる

帰省子の元気な顔が土産なり

懸崖に座して常濡れ滝不動

蟬しぐれ兵士の墓も古りにけり

蟬の穴金輪際を見てみだし

下闇に苔むしてをる力石

石仏を打ちてやまざる襖滝

身に入むや供花おく横断歩道脇

コスモス園囲いの綱に忘れ傘

百選の棚田を抱き山粧ふ

山門の臥竜の松の色変へず

ビル街に彩づく桜紅葉かな

秋澄むやテニスラリーの音高し

行厨や四囲の花野を籬とし

回廊に泉水の秋聴ききにけり

那智黒の小路に仰ぐ初紅葉

供花のごと陸墓のほとり百日草

色変へぬ松要とす大手門

豊秋の四方に連なる山襖

ドライブの窓に伴走秋の雲

闇に映ゆ五重の塔や万灯会

池の面の樹影を縫ひてとんぼ飛ぶ

一太刀に背なの裂けたる蝉の殻

噴水と一緒にをどる子供たち

欄干に横並びせるとんぼかな

御手洗におぼれし蟻に助け指

目つぶしの西日に覚むる車窓かな

うち 屈み 働く 蟻 を 観察 する

六地蔵 祀る 御手洗 蛸 蚪 の 国

雨 に 伏し 将棋 倒し の 小判 草

露草の瑠璃散らしたる陸墓かな

玄関の三和土涼しと犬眠る

下閨の謎めく岩に謂れあり

姦しく尽きぬおしやべり薔薇の昼

運河いま行く手に立ちし雲の峰

広畑を十字返しやつばくらめ

右左新緑せまるハイウエー

慈悲塔のしとねのごとく花すみれ

風よ吹け園児の仰ぐ鯉のぼり

鋭角に向き変ふ鯉や水温む

山腹のソーラーパネル春日燦

石磴の落花畳を踏みまどふ

鼻づらに花屑のせて犬散歩

馥郁と梅が香満つる日和かな

出不精の夫を連れ出す梅日和

春塵や仁王の太きあばら骨

柄杓もて割る御手洗の薄氷

眼の手術終へて安堵の根深汁

観音の肩に物見や寒鴉

ごまめみな背筋をピンと姿よし

憤怒する仁王へ落葉しぐれかな

山門を包める落葉煙かな

ぼろ市に昭和名残の古マツチ

人気無き陸軍墓地や小鳥来る

新米の旗林立す道の駅

走り根に跳ねあらぬ辺へ木の実落つ

ほろ酔いの足を止めたる良夜かな

蔦紅葉攀じる池塘の石垣に

カ石まぶしからずや秋日落つ

塚なせる無縁仏や虫の秋

車椅子身振り手振りに阿波踊

阿波踊り調子取り合ふ下駄の先

雑草を引く格闘技さながらに

駈けめぐる風の意のまま青田波

脳天へ錐揉むごとく蝉しぐれ

蝉しぐれみな伏し目なる六地蔵

下闇にならびたちたる義士の墓

樹下涼しわらべ地蔵の笑ひをり

山門を入るや広がる蓮浄土

萍のジヤングルを縫ふ稚魚の群

露草をしとねとしたる兵の墓

新緑や線描めける磨崖仏

湖のちりめん波に風光る

山あひの高速高架落花舞ふ

石畳踏みどころなき花の屑

ざんばら髪ふるごと風の雪柳

泥沼を足で探りつ蓮を植う

碧眼と会釈を交はす梅の園

潜く尻我もわれもと春の鴨

総玻璃のビル燃ゆるごと春夕焼

薄氷に閉じ込められし木つ端かな

風花の舞ふ里山の道の駅

待春や白内障の手術終へ

神妙に正座して受くお年玉

墨衣纏ふ尼僧も年の市

掌に柚子転ばせる終い風呂

口紅をおちよぼに塗られ七五三

幼の手ひらき団栗見せくれし

道しるべ古りて読めざる萩隠れ

墓守の背に群れて憑くあきつかな

突撃のごとくに飛機や雲の峰

あめんぼう風に抗ひつつ進む

蝉しぐれ陸軍墓地を包みたる

空蟬の背な一太刀に開きけり

立葵ぶつかりあひて風いなす

日盛りへ水一杓す六地藏

サーブ打つ球の重さや梅雨湿り

薔薇意地悪撮らんとすればそつぽ向き

偕老の二人が潜る薔薇アーチ

神にます大盤石や木下闇

轉れる無縁仏の寧かれと

延命の水に浮きたる落椿

裏山を埋めてミモザ黄なりけり

臥龍松身を乗り出せる春の池

立観音裳裾を埋む梅の花

渡船場の磯席卷すゆりかもめ

雪道の轍は歩き易きかな

五指組みて祈るマリヤに春日燦

轉りに耳澄まし
在す寿老神

観音の慈顔を濡らす時雨かな

寺寒し素足の僧の小走りに

散り紅葉貼り絵めくなり石畳

落柿舎はここにあるよと子守柿

粧へる山近づけて湖静か

トタン板太鼓叩きに木の実落つ

山粧ふヘアピンカーブ曲がるたび

さし石と文字刻まれて露の石

屍の骸のごとく蓮枯るる

吐息めくトランペットや秋風裡

曼珠沙華枯山水の一隅に

鉢杉の嶮競ひをる秋の空

鉢合せしても怪我なし蟻の道

雨しづく風船かづら弾きをり

うそ寒しくわえ煙草のお嬢さん

蝉しぐれ間遠となりし亭午かな

屹立す鉾杉襖峡涼し

風遊ぶ四葩の毬の揺れに揺れ

明王の背な常濡れや滝しぶき

植田から植田へ駆ける雲迅し

猫眠りみる下闇の忠魂碑

大仰に棟の花の風に揺れ

観音の視野に広がる若楓

燕の巢壊さないでと張り紙す

大の字の嬰兒の額新樹光

若楓日の斑を落とす石畳

大粒の涙で拒む入園児

兵士墓桜吹雪のその中に

移り気の風力計や街うらら

踏青子陸軍墓地を訪ねけり

復興を祈り続けて春を待つ

急坂に喘ぐダンプや山笑ふ

御手洗に膨れ溢るる春の水

雀どち上を下へや芽木の枝

水底の鯉身じろがず凍て返る

不器量な大根並ぶ道の駅

鹿苑の養生鹿に風花す

身罷りし愛犬悼む寒昂

身に入むや家打ち壊すブルトーザ

存問の思ひをこめて賀状書く

着ぶくれてブレーキかかる滑り台

老犬を老老介護冬ごもり

余命無き老犬看取る夜長かな

神留守の鳥居に踊るチンドン屋

末枯れの野にいと小さき忠魂碑

線香の灰の山なす遍路寺

爽やかや研師の声のよく響き

参道にぼろ市並ぶ秋彼寺

右手左手参道狭め萩盛る

しだれ萩裏参道を通せんぼ

ペダル踏む道どこまでもいわし雲

急磴の吾につきくる鬼やんま

日盛りに着物を吊るす古着市

白南風にテント膨らむ骨董市

無縁墓寄せて塚なす木下闇

梅雨の蝶兵士の墓を離れざる

亀の子の落ちては上る石舞台

夏草やサーカスの象出番待ち

裸婦像の肩に触れもす蔦若葉

手水鉢水満々と苔の花

桜散る犬のぼんこの背中にも

水脈を曳く鯉の背びれに風光る

突堤の人に手を振る花見船

春雷やまどろみるたる脳天に

春疾風カート独りで走りだす

参道に春雨傘の花が咲く

復興を祈りて流す加太の雛

春風に鳥居の幣の千切れさう

老の吾もバレンタインの菓子作る

老犬に合はす歩みや日脚伸ぶ

しんがりの走者へ拍手温かし

神殿をくゆらすどんど煙かな

夜回りは子らの声なる火の用心

走り去る車を追ひて落葉舞ふ

裸木に鈴なりとなる雀どち

木の实降る悲鳴をあげしトタン屋根

枯葉ふと止まるときありまた落つる

人絶えぬ北向き地蔵菊香る

老犬をカートに散歩冬日和

露万朶ダイヤ光し朝日出づ

大屋根を登りつめたる牽牛花

敗荷の風に抗ふ力あり

自転車も同舟島の秋遍路

十三夜ベンチの影は彼彼女

身に入むや一兵卒の小さき墓

天高く聳ゆ連理の大銀杏

ガラシヤの碑に佇めば小鳥来る

相聞のごとき二輪の彼岸花

つたなき字なれど孫より暑の見舞

蔦かづら宇宙遊泳してやまず

秋の川風駈けるたび波生まる

喜雨うれし一息いるる庭のもの

岩陰に屯す稚魚や水澄める

墓どころ寧かれと群るあきつかな

川風に火照りを冷ます残暑かな

啼く声の心もとなく残る蝉

時に和す読経の声と蝉しぐれ

暗闇に灯火浄土や夏念仏

野分けくる予兆か雨の匂ひけり

湖を一と呑みせんと雲の峰

青梅の熟し時待つ筈の中

暗闇の生きた宝石蛍狩り

老幹の洞の深さや苔茂る

石仏に果つること無き打たせ滝

定例句会入選句

鳥影の一旋したる植田かな

園丁らみな膝行す苔の花

閻王の大き目玉に春の塵

み仏のごとき大岩落椿

飛び石に水の膨らむ春の川

磯の香の砂嘴をもとほり踏青す

春
と
も
し
酒
蔵
支
ふ
太
柱

酒
蔵
の
美
人
ポ
ス
タ
ー
春
と
も
し

幼
子
の
瞳
に
燃
ゆ
る
と
ん
ど
の
火

ご受難のレリーフ見つつ落葉踏む

磊々の汀を綴る彼岸花

道をしへ日の射す岩に玉びかり

幽谷の岩間を裂きて滝落つる

岩窟を高御座とす滝不動

岩襖晒すがごとく滝落つる

日矢こぼれ落つ群落の羊齒涼し

草の秀をのぼりつめたる天道虫

百段の磴うち仰ぐ紅葉晴

蘭亭の簷牙映して池澄める

林立す白きマストに秋の風

風化して傾ぐ石龕苔の花

万緑にゲートボールの音響く

磴のぼる吾を励ます道をしへ

どんど屑上昇気流に乗りにつけり

着ぶくれて押すな押すなのバーゲンへ

樹下涼し謂れ札たつ力石

岨道を急かせるごとく法師蟬

山湖いま色なき風の渡りけり

長蛇なす貨物列車の暑さかな

滴りの岩に目をむく不動尊

飛簷へと風に高舞ふ落花かな

彩窓を貫く春日堂に満つ

細波に紅葉影消ゆ池鏡

全開す広き方丈涼新た

稻妻の山も裂けよと閃めきぬ

身にしむや外人捕虜の欠けし墓

緑陰に絵本ひろげる母子かな

水馬三段跳びを見せにけり

野菜畑広しあちこち恋の蝶

恵方とて険磴に息切れにけり

オルガンの響く聖堂寒からず

万葉の恋歌の碑に秋思憑く

園に舞ふ貴婦人のごと黒揚羽

欄干を虜にしたる蔦紅葉

墓洗ふ土に沁みこむ闕伽の水

磊磊を見せて細りし夏の川

蒲の穂を揺らすは鯉と分りけり

トラピスト畠の真中に山茱萸黄

中空へ灰遊泳すどんど焼き

薄の穂風に伏しては立ち上がる

砲台は時代の遺物秋の風

雲の峰より一筋の飛行雲

炎昼や貨物列車の長きこと

蓮浮葉風に抗ひ裏返る

絵硝子にダビデの星や春日燦

蘭亭はこちらと園の道をしへ

蘭亭の尖りし屋根に風光る

春水の堰落つる音逞しき

病院のロビー真中に大聖樹

箒目を守る翁や菊花展

風薫る京花町を人力車

夏館ドーベルマンを侍らしめ

雲間より鳶急降下する枯野

老犬を臥させて落葉掃きにけり

濃淡にそよぐ棚田の青田風

背くらべしてをるごとくつくし伸ぶ

吟行句会入選句

松手入梯子見ゆれど足見え
ず

声高き案内人の息白し

大いなる梁が支へし冬館

右左白壁映ゆる路地小春

老鶯の美声に森を逍遥す

棧橋をきゆきゆと鳴かせる卯浪かな

苔涼し瘤だらけなる御神木

摩天楼ビル抽んでし枯木立

虚栗ここだ散らばる岨の道

太陽の塔万緑を抽んでし

小流れの樂の涼しき州浜かな

漣のかけて濠の面風ひかる

捨畑に宝石のごといぬふぐり

落合の白波高し紅葉川

身にしむや庭に震禍のモニユメント

厚物に衰えの見ゆ菊花展

万緑に朱の楼門を仰ぎけり

色変へぬ松のしもとに力石

鐘樓を借りて推考風涼し

蘭亭を模す四阿や菖蒲園

ほうき目に乱れなき庭いと涼し

酒蔵の昔を展示土間涼し

雨憎し崩御寸前白牡丹

築山のなぞへになだれ雪柳

落椿屋根に嵩なす外厠

螢火の点滅の息揃ひけり

水路閣逸る流れや新樹光

高欄に滴る嶺々を遥拝す

尻ふつて高級金魚ひるがへる

木漏れ日を踏みて分け入る滝の道

花屑を分けて水尾引く観光船

城塁の裾に炎の曼珠沙華

三川の落ち合ふところ渦涼し

雨粒の朝日に光る蜘蛛の糸

若楓川霧に枝重ねけり

滝壺の不動常濡れ避けられず

滝風や羊齒群落の揺れやまず

大岩にぶつかるとく梅雨出水

うそ寒し鳥居のそばの占い師

枯蓮の地獄に沈む一輪車

大絵馬が裏に鎮座す年用意

薫風や絵図をたのみに古都巡る

塔の影水面に乱れ青嵐

万緑や池鏡なる浮見堂

悴める子の手を双手つつみかな

夕潮に白き腹見せ鰯はねる

青空を被ひつくして糸桜

美容師のはさみに委ね目借時

あとがき

素晴らしい句集が出来上がり夢のようです。

俳句との出会いは二〇〇三年、インターネットでウェブサイト『ゴスペル俳句』を見つけ、ごく自然に導かれるようにご縁をいただきました。

やがてオフラインでも句会が開催されるようになり、直接みのるさんの指導を受けるようになりました。吟行や句会を通して親しい句仲間も与えられました。特に毎月の吟行が楽しく欠かさずに参加するようになりました。

この句集は、句会で入選した作品を、さらにみのるさんに再選していただいて纏めました。読み返しますとその時々が懐かしく心が和みます。

大親友であつた平島ひかりさを天国へ見送つたときは本当に悲しく虚しくも思いましたが、俳句がそれを癒やしてくれました。これからも生涯の友としての俳句、宝としての句仲間を大切にしたいと思ひます。

愛犬ぼんこのことにも触れて下さつたみのあるさんの序文、こころに沁みました。句集についても万端ご指導いただき心から厚くお礼申し上げます。また、印刷製本の労をとつていただいた有松せいじさんにも感謝します。

平成三〇年七月吉日

鈴木 ぼんこ

『夜長』 鈴木ほんこ句集

平成三〇年七月十五日 印刷

平成三〇年七月十五日 発行